

カネミ油症事件母親から伝わる影響を調べたら…

へその緒から

ダイオキシン類

1968年に西日本一帯で発生した食中毒「カネミ油症事件」で、認定患者の母親からへその緒を通じて子どもに有害物質が伝わった可能性について調べる有志らによる「へその緒プロジェクト」が11月、報告書をまとめた。検査では、3人の子どものへその緒からいずれも健康者よりも非常に高い数値の有害物質が検出されたとし、国に対して早期の調査を訴えている。

(山田祐一郎)

同プロジェクトは、カネミ油症事件をテーマにしたドキュメンタリー映画「母と子の絆ーカネミ油症の真実」を製作した稲塚孝監督が中心となって進めている。映画に出演した長崎県五島市在住の認定患者、岩村定子さん(75)が保存していた3人の子どものへその緒を、資金を募って民間検査会社に分析して

もらった。3人のうち、長男の満広さんは73年8月、口唇口蓋裂があり、肛門は閉じたまま、心臓にも障害がある状態で生まれ、4カ月で亡くなった。その後生まれた次男(49)と長女(47)とともに油症患者として認定されていない。

カネミ油症は「カネミ倉庫」(北九州市)製の米ぬか油を摂取した人が健康被害を訴えた食中毒事件で、製造過程で混入したポリ塩化ビフェニール(PCB)やダイオキシン類が原因とされる。強い倦怠感とともに全身に大量の吹き出物がでるなど当時1万4千人が健康被害を訴え、世界最大級の「食品公害」とも言われた。厚生労働省所管の研究機関「全国油症治療



岩村定子さんが保管していた満広さんのへその緒が入った箱。「母と子の絆ーカネミ油症の真実」製作委員会提供

研究班」が定めた診断基準によって認定された患者に、国とカネミ倉庫が健康調査協力費や医療費を支払っているが、認定患者は今年3月時点で2377人にとどまる。

報告書では、3人のへその緒からは、油症の原因物質であるダイオキシン類の濃度が健康者や認定患者よりも高い値が検出された。数値は満広さんが最も高く、次男、長女と順に下がっていく傾向が見られた。分析結果について摂南大の宮田秀明名誉教授(環境経済学)は「3人のきょうだいのへその緒からは、似たような成分が検出された。生まれる時期に数年の間隔があっても母親から胎児へ汚染物質が移行したと考えられる」と指摘する。

2021年度から厚生省の研究班は、親が認定患者の子や孫に対する影響調査を実施。23年に「口唇口蓋裂」の発生率が高い傾向にあることが分かったなど報告したが、新たな認定にはつながっていない。宮田さん

有志が分析依頼 進まぬ子世代の救済「政府が調査を」

は「胎児の場合、化学物質による汚染の影響をより受けやすく、どのような症状が出るのかも想定が難しい。胎児の時点でどのような汚染を受けたのか、へその緒から調べることは重要だ」と訴える。

満広さんのへその緒は、13年にも研究班が検査し、有害物質を確認しているが、出生時の障害との関連を見いだすことはできないと結論付けている。岩村さんは今年、改めて満広さんの油症認定の申請をしたが、長崎県は「へその緒のダイオキシン類濃度の数値は認定の診断基準となっていない」などとして却下した。

稲塚さんは「認定患者の子どもはいま診断しても基準値を超える数値は出ない。数十年前のへその緒が長年、いろいろな症状に苦しんできたことの証明となる」と強調する。現在、プロジェクトには山口県下関市や名古屋市などの認定患者らから、複数の子どもへのへその緒が預けられている。稲塚さんは政府の調査と救済を強く求める。「本来であれば、検査や分析はわれわれ民間人ではなく政府の責任で行うべきだ」